

I 福山市

ミッション
ビジョン

福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
各中学校区・学校が、資質・能力の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、
日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 資質・能力	自己を認識する力／自己選択できる力 粘り強くやり切る力 挑戦し続ける力 表現力 コラボレーション力
1.長期欠席者の減少に向けた取組の推進。	・「学習を通して考えたことや振り返ったことを書く」94.0%（小）、「授業で勉強した事柄をいくつか組み合わせて解く」87.2%（中）と、学んだことを使いながら学習に向き合う児童生徒が増えている。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	知：自分の考えを持ち伝え合う子 徳：人の気持ちがわかり協力できる子 体：健康でねばり強い子
2.学力調査結果を分析して具体的な改善策を確認して成果につなげる。	・小中ともに児童生徒が自ら動き、生活をよりよくしようとする姿が見られる。 ・「体力づくりに取り組んでいる」の肯定評価が84.4%である。（小）	中学校区として統一した取組等	・神辺西中学校区でめざす授業の姿を共有（「書く」ことを中心とした「考える」授業づくり） ・児童生徒による生徒指導規程（生活のきまり）の見直しの継続 ・神辺西中学校区における「資質・能力」に基づく個に応じた指導の実施

Ⅲ 自 校

ミッション		育成する力 資質・能力	自己を認識する力	思考し判断し表現する力	試し、挑む力
伝統を現在に生かし、未来を生き抜く人を育てる。		めざす 子ども像	・学びや生活を通して自己を振り返ることで、学んだことや良さ、がんばり、課題を実感できる子ども。	・じっくり考え、自分の考えをもつ子ども。 ・互いの考えを伝え合い、対話を通して学ぼうとする子ども。 ・学習や生活の課題に対して、解決の方法を考え行動する子ども。	・学習や生活の様々なことに対して、試行錯誤を繰り返したり、挑戦してみようとしたりする子ども。
学校教育目標					
自考自動 ―自ら考え、自ら行動する―					
現 状		研究	テーマ	「書く≡考える」⇒「伝える」学びの実現	
・2024 全国学力調査では、全国平均に対して、国語-0.8 算数-0.6 であった。学力調査において無回答率が低く、記述式問題全般において全国平均を上回っており、考えること、そして考えを書くことの定着に成果が見られる。図への書き込みや、相手の考えの意図・意味を考えるという点に課題がある。また、相手意識を持って分かりやすく表現することに苦手意識を持つ児童が多く、表現力及び自分の考えの表出に課題がある。 ・生活目標の設定及び振り返りを通して、自分たちの行動を見つめ直し、行動に移すことができた。また、縦割り班そうじに取組むことで、自分たちのそうじを振り返ったり、教え合いを行ったりすることができている。 ・振り返りカード等の自己の運動を振り返る機会や、様々な運動ができるような環境を通して、児童は運動に取り組むことができている。 ・自ら考え、行動に移していくリーダーの育成に課題がある。			内容等	学び手が「選択」し「自己決定」したことを「伝え合う」授業 ・「書く」と「対話」を通して、自分の考えを再構成する授業を展開する。 ・「書く≡考える」内容を具体化（何を書き、何を考えるか）した教材研究を行う。 ・学びの選択肢を取り入れることで、児童がそれぞれ学びを進められるようにする。 ・「伝える」ことで、相手意識を持った表現力を高めたり、自分の考えを見直したりすることができる場を取り入れる。	
		めざす授業の姿	「書く」と「対話」を通して自分の考えを整理し、共に学ぶ楽しさを味わう授業。 「伝える」ことを通して、自己の表現や考えを見直す授業。		

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立神辺小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力 を 使 い し た 評 価	達 成 評 価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 を 使 い し た 評 価	達 成 評 価	総 合 評 価	改善方策
2	「書く・考える⇒伝える」学びを実現する。	★	継続	児童が自己の学びを選択し、伝え合うことを通して、自己の考えを深めたり広げたりすることができる授業を実現する。	①単元や授業の中で、児童一人ひとりが選択・自己決定できる場を設ける。 ②個の学びを他者と伝え合う場を設定し、学びを紡ぐことで、個の学びの再構築を図る。	・「児童が選択・自己決定する機会を設けた授業づくり・教材研究を行っている」授業者の割合を80%以上にする。 ・「他者と考えを伝え合うことを通して、自己の考えが深まったり広がったりした」と感じる児童の割合を80%以上にする。	□主に国語科・算数科における校内研修を行い、100%の授業者が「児童が選択・自己決定する機会を設けた授業づくり・教材研究を行う」ことができたと回答。 □89%の児童が「他者と考えを伝え合うことを通して、自己の考えが深まったり広がったりした」と回答。	3	3	○引き続き、「選択・自己決定」の場を設けた授業づくりを進めていく。 ○「伝え合う」場を設定するだけでなく、児童同士の学びや考えを紡ぐための工夫や指導者の在り方について考え、職員研修や実践交流等を行っていく。	□職員間で伝え合う児童の具体的な姿を共有したり、帯タイム活用し、全校で対話の練習に取り組みんだりした。 ◎100%の授業者が「児童が選択・自己決定する機会を設けた授業づくり・教材研究を行う」「授業の中で、児童が伝え合い、自分の考えを再構築する時間や場を取り入れる」ことができたと回答。 ◎89%の児童が「他者と考えを伝え合うことを通して、自己の考えが深まったり広がったりした」と回答。	3	4	4	○今後も、授業だけでなく帯タイム等も活用し、対話の練習に取り組む。その際、「話す」スキルと合わせて反応をするなど「聞く」スキルを高めたり、「それに」「似ていて」「違って」「つまり」などと児童同士が対話をつなぎ学びを深められるようにしたりしていく。
2	「書く・考える⇒伝える」学びを実現する。	★	継続	児童が自分や相手のことを考え、自分の行動を振り返り、自ら行動に移すことができる。	①每学期1つの生活目標を設定し、学級活動で自らの行動を振り返る時間を設ける。 ②段階的にあいさつの在り方を考え、自ら進んであいさつができる児童を育成する取組をすすめる。	・学校全体の生活目標の達成度を85%以上にする。 ・あいさつをされたら、あいさつを返すことができる児童を80%以上にする。 (中間：あいさつをされたらかえすことができる児童。最終：自分から進んであいさつができる児童。)	□1学期の生活目標「あいさつをされたら、あいさつを返すことができる」児童は89%と目標は達成できているが、最終目標の自分から進んであいさつできている児童はまだ少ない。	4	4	○児童会が見本となるあいさつの仕方を紹介し、学校全体で児童が進んであいさつをするように指導していく。 ○自分に自信が持てず、進んであいさつができていない児童が多いので行事などを通して自己肯定感を高めていく。そのために、他学年と交流しお互いの良いところを見つけたり、児童会から各学年の取組の様子を積極的に発信したりしていく。	□行事の際に、児童会が中心となって各学年の様子や発表内容を全校に放送し、行事への意欲を高めた。また、行事などで交流学年で発表内容を見せ合い、お互いの良いところを評価し合うことができた。 ◎88%の児童が、「学校全体の生活目標を達成できている」と回答。 □児童会の挨拶運動や公約でどのような挨拶を目指しているのかを明確にし、できている児童を表彰するなどの取り組みを行った。 ◎89%の児童が「あいさつをされたら、あいさつを返すことができる」と回答。	4	4	4	○相手意識をもたせるために、授業始めの挨拶の仕方を統一する。また、必ず服装や身の回りを整えてから授業をスタートできるように学校全体で徹底して指導していく。

4	「書く、考える⇒伝える」学びを実現する。	★	継続	児童が積極的に運動に親しみ、体を動かすことが楽しいが、体力向上を図ることができる。	①積極的に運動に親しむことができるように、体育委員会を中心に遊びの提案や運動コーナーの設置、運動のコツを資料として提示する。 ②定期的に体育の教材づくりや実技研修を行い、児童が運動についての自己理解の振り返りを書くことができるように視点を提供する。	・「運動に取り組んでいる」児童の割合を85%以上にする。 ・学期に1回以上、実技研修を行う。	☐ 「運動に取り組んでいる」児童の割合が78.6%と目標に達しなかった。質問内容の全てのことをしていないといけないと捉えた児童が多かったように思う。体育委員会が鬼ごっこやボール遊びなどを企画し、活動することができた。器械運動（鉄棒運動）の領域では、教師見本を作成した。 ☐ 1学期にボール運動（ネット型）と体づくり運動の実技研修を行った。2学期の内容を取り上げ、授業力向上を図った。	4	3	○質問内容をどれか一つでも当てはまればよいような内容に変更する。 ○体育委員会の遊びの企画は継続する。 ○2学期実施であるゴール型と3学期実施のベースボール型の研修を計画し、授業力向上を図る。	☐ 体育委員会が月1回程度、遊びの企画を行い、多くの児童が運動に取り組むことができた。 ◎93.1%の児童が「運動に取り組んでいる」と回答。 ☐ ボール運動領域（ネット型）の授業づくり研修を行った。系統性を意識し、低・中・高で教えることを考えさせることを職員間で共有することができた。	4	4	4	○児童が積極的に運動に取り組むことができるように、思わず体を動かしたくなる場づくりを行う。 ○体育科の実技研修だけでなく、理論研修も実施しながら、各領域の系統性などを職員で共有していく。
5	教職員一人一人が働き方を見直し、学び取組を推進する。		継続	教職員一人ひとりの働き方に対する意識の醸成を図る。	①超過勤務40時間以内を目指し、部会や学年で見通しを共有し、互いに声を掛け合う。 ②ミニ研修（任意研修）等、教職員の関心や強みを生かした場づくりを工夫する。	・超過勤務40時間以内の職員90%にする。 ・職員アンケートにおいて、「職員との対話を通して学びを深めている」職員80%以上にする。	☐ 超過勤務40時間以内の職員は、95.8%である。学年で声を掛け合い、退校時刻を意識して業務に取り組むことができた。 ☐ 職員との対話を通して学びを深めている職員は、95.9%である。互いを認め、高め合うことができていると実感している職員が多い。また、職員の困り感に合わせて、強みを生かしたミニ研修を自発的に開催することができた。	4	4	○学年主任を中心に進捗状況を確認し、一人一人が退校時刻を意識して業務に取り組めるようにする。学年を越えて声をかけあったり、退校時刻予定表を活用して、各学年の退校時刻を学校全体で把握したりできるようにする。 ○職員の困り感やニーズに合わせて、一人一人の強みを生かしたミニ研修を月1回設定し、学び合う場をつくる。	☐ 学年主任を中心に、進捗状況を確認し声をかけたり、業務の優先順位をつけたりすることで、多くの職員が超過勤務40時間以内となった。 ◎超過勤務40時間以内の職員は、100%である。 ☐ 職員の困り感やニーズに合わせた研修や、学校全体にとって必要な研修を仕組み、互いに学び合う場を設定することができた。 ◎職員との対話を通して学びを深めている職員は、100%である。月1回以上、ミニ研修を実施することができた。	4	5	5	○業務改善について様々な視点から考えられるように、各部で検討し、できることから実践する。職員一人一人が、時間の使い方を工夫するとともに、働き方を見直していく。 ○職員一人一人がやりがいや充実感を高める職場となるよう、授業を通して、こどもや教師のよさを伝えたり、助言をしたりする。また、分掌等の業務では、進捗状況を確認したり、承認や労いの言葉をかけたりすることで、一人一人の職員の取組を認め価値づけしていく。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。